
《物語の黙示録》 -Revolution Story-

幾刃 傾奇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

《物語の黙示録》 - Revolution Story -

【Nコード】

N4324X

【作者名】

幾刀 傾奇

【あらすじ】

スキル
技術力

人の先天的才能。それは、時として「超能力」、「魔術」、「魔法」と呼ばれた。

そんな能力がこの世に生み出されてから早 2世紀が経とうとしていた。

そしてそんな力を育成、調査、開発するために日本政府は「学園島」（アカデミック）を建設した。

そんな「学園島」を舞台に変人主人公「周防 大和」と愉快な仲間
たちが織り成すSF系学園モノガタリ、ここに開幕。

0 - ? (前書き)

こんにちは、傾奇 と言います。

これは、自分の連載中小説の改訂版です。

みなさん、是非ご覧下さい。

0 - ?

技能力^{スキル}

人の先天的才能。それは時として「超能力」
、「魔術」、「魔法」と呼ばれる力。

人は生まれた時からその力を持っており、全員6歳になると「能力調査」(スキヤナー)と呼ばれる装置で調べられる。そして能力の強弱^{レベル}によって四段階に分けられる。

レベルの四段階

「甲?級」

最も強い能力者たちを指す言葉。本気を出せば7日間で世界を制圧出来る程の能力を持つ。「学園島」(アカデミック)に13人しか存在しない。

「乙?級」

「甲?級」より弱いが1人で(能力にもよるが)軍隊一個楽々につぶせる程の能力者たちを指す言葉。「学園島」(アカデミック)に20人程存在する。

「丙?級」

「学園島」(アカデミック)の中で平均的レベル。「丁?級」に次いで多い。

20人集まってようやく軍隊を倒せるぐらいのレベル。

「丁?級」

「学園島」(アカデミック)の中で最も多いレベル。能力の強さは1人で頑張つてパンチラ出来るぐらいの風を起こせたり出来るなど最も弱い。

アカデミック 学園島

技能力を育成、調査、開発のために日本政府が造った人工島。島の周りは技能力^{スキル}への「甲?級」の能力^{スキル}を使用しても壊れない特殊な鉱物で作られた塀で囲ってある。そのため、島と本島へ日本^{スキル}を繋ぐ手段は毎日年中無休動いている「機関車」(トレイン)しかない。人工は1億人ほどで大体が学生、若者である。また島は北海道と同様の広さで科学が発展しているため電力供給はすべて自然エネルギーで賄っている。そして、東京以上の都会である。しかし、自然との調和が取れているため都会の弊害がなく理想郷となっている。

学校はそれぞれ北区、南区、東区、西区の4つにたくさんあり、主人公は東区立第3技能高等学校に通っている。また、姉妹校として北区から

北区立第1技能高等学校、南区立第2技能高等学校、西区立第4技能高等学校とあり、数字が小さいほど偏差値が高い。

マスターズ 元帥族

12の名家が集まり作った組織のこと。遺伝子弊害の性で能力の系統がそれぞれの家で固まってしまっている。組織の立ち位置としては日本政府の首領^{マスターズ}と元帥族と最高権力者より強く天皇みたいな立場である。また、全国民のあこがれでもあるらしい。

12の名家の名字

「睦月」、「如月」、「弥生」、「卯月」、「皐月」、「水無月」
「文月」、「葉月」、「長月」、「神無月」、「霜月」、「師走」

スキャナー 能力調査

CTRスキャンのような大型機械で体をスキャンして能力の種類、レベル、どのような能力かを調べる。

また、能力の系統は二段階に分かれる。

能力の系統

「ナチュラル」

炎、水、風といった自然を操る能力のこと。

「イレギュラー」

ナチュラル以外の能力のこと。

機関車^{トレイン}

全長1km、高さ100mというバカでかい超巨大SL。

動力不明、運転手無し という謎に包まれていて何時、誰が、どう
いう目的で作られたかすら分かっていない。

学園島唯一の本島との通路「アカデミア・ウェイ」の中を走って
いる。

車両は3両編成で1両に約4000人が乗れる。

SAT

Skill Assistant Terminal (技能力補
助端末) の略。

現代ではは必要不可欠の端末でCPU、バッテリー、ベースPGM、
サブパーツの4つから構成されており、パズル感覚で簡単にどんな
不器用な人でも自分用にカスタマイズできるのが特徴。

演算能力の補助や、簡単な肉体回復を自動で行ってくれる。

また、通常の携帯電話の能力も持っている。

0 - ? (後書き)

こんにちは？お久しぶり？どっちでもいいか…。

というわけで傾奇です。

ちよっと、凝った内容ですが（凝ってるかな？）また、心機一転頑張りますので

読者の諸兄皆様方どうかよろしく願います。

それでは。

0 - ? (前書き)

どうも、傾奇です。

2話目です。

是非、ごらんください。

東区立第3技能高等学校の基盤組織

学園生徒会、学園風紀委員会、行事統括会

学園生徒会

学校の最強の6人の総称。

役職はそれぞれ、生徒会長、生徒副会長（二人）、書記、会計、雑務 である。

雑務は必ず「丁?級」の一年生が入ることが決まっている。これは、「丁?級」でも生徒会に入ることが出来るという、勉強意欲を上げる思索がある。

しかし、かえってレベル間の確執が強まっている。

学園風紀懲罰委員会

学校の生徒会と同等の権力を持つ特殊な委員会。

通常の委員会は生徒会の傘下に入るがこの委員会だけは完全に独立している。

メンバーの数は底知れないが、生徒からは嫌われている。

行事統括会

学校の行事全てをを統括する会でこれは委員会では無い。

部活対抗マッチングと姉妹校交流戦（刹那杯）の時に活躍する。

また行事全てをあくまで統括するわけで実行委員会が別に存在する。

委員会の種類

図書・書籍委員会、保健委員会、美化・環境委員会、体育委員会、
総務委員会、学園風紀懲罰委員会。

~~~~~

学園島について

学園島は国家である。なのでどの国からも侵害を受ける事はない。  
(学園島憲法第1条より抜粋)

上記の説明の通り学園島は国家である。なので国家の三要素を持つている。

- 1、領域 学園島全域。
- 2、人民 学園島の若者たち。
- 3、権力 元帥族の皆さん。

つまり学園島は国家である。

それぞれの省庁

元帥族のそれぞれが省庁のトップ、ナンバー2である。

- 1、総務省 「睦月」、「師走」  
すべての庁の管理を行っている。

- 2、司法庁 「如月」、「霜月」  
検察、裁判、弁護を司る庁。

- 3、財政庁 「弥生」、「神無月」

この国の財政を司る庁。

4、国交庁 「卯月」、「長月」  
この国の輸入、輸出を司る庁。

5、環境庁 「臯月」、「葉月」  
この国の環境を司る庁。

6、教育庁 「水無月」、「文月」  
この国の教育を司る庁。

0 - ? (後書き)

みなさん、ちわーっす。  
傾奇です。

今回は前回の続きで説明です。(何時になったら本文にはいれる  
のやら…。)

更新は、休日だけになります。すいません。

という事でサラバダー。

0 - ? (前書き)

久々の更新だあゝ

というわけでこんちわ、傾奇です。

第0・2話をごらんください。

（人物説明）

周防 すおう やまと 大和

身長 177cm  
体重 55kg

好物 あんパン、緑茶  
嫌いな物 無し  
趣味 読書  
年齢 15歳  
性別 男

チャームポイント

x字の前髪

容姿

黒髪、紅目、少し鋭い眼光、真っ直ぐ伸びた鼻筋、細マツチヨ、あとは平均的

性格

若干クールで、「助けを求められたら助ける、但し助ける相手は選ぶ。」という信念を持っている。

この信念は要約すると、「助ける、助けないは自分次第。」ということ。

助けるとトコトン助けるが、助けないとトコトン見捨てるという極端ぶり。

また、自分が認めた親友は「助けを求めなくても困っていたら確実に助ける。」という矛盾する考えと、「他人（他人と言っても自分の親友、友達、知り合い）が傷つく又は苦勞するくらいなら自分が傷つく又は苦勞した方が良い。」と自己犠牲的で仲間思いな考えも持っている。

このような感じだが家事炊事が出来て、対人スキルもバツチリ。kと社会不適合者では無い。

厚顔でポーカーフェイス持ち。なので大和の嘘は悠、優那、梓、飛鳥と限定された人にしか嘘と分からない。

一人称

「俺」

「名字+さん」、（親しい場合）「名前」

戦術

スキル

技能力には余り頼らず己が編み出した体術「マーシャル・アーツ」（総合格闘系武術）を基本として戦う。（マーシャル・アーツとは自由な戦い方で殴る、蹴るを自由に様々に活用する武術の事。）戦い方はまさしく自由に人を武器として活用して効率の良い戦い方をする。

また、相手の骨を折ったりはするが（危険がない程度に、そして綺麗に）殺したりは絶対しない。

そして、綺麗に折るため相手はすぐ直りやすい。

女、子供とは余り戦わないが必要となると戦う。

神武威  
悠



身長 170cm  
体重 50kg

好物 ラーメン

嫌いな物 酢豚

趣味 無い

年齢 15歳

性別 男

チャームポイント

右目の泣きぼくろ、真っ赤なバンダナ

容姿

赤髪、青目、バンダナ、穏やかな顔、細マッチョ

性格

女、子供に優しいフェミニストな性格だが、本人自覚無し。

またこの性格が相まって「女、子供に手を上げない」ことを信念としている。

またこの性格と顔がカッコよくイケメンな為女性から大モテである。

裏でコソコソとする行為（例：イジメ）が大っ嫌いで、さらにそれをひた隠しにして責任転嫁、又は人の前だけでいい子振るやつはもっと嫌い。

また学園島1の能力者で「最強で最凶」。そして頭が良く、運動神経が良いが度々常識外れの行動（例：1ヶ月清涼飲料水だけの生活）を行ったりするので大和からは「バカと天才は紙一重は事実だな。」と呆れられている。

口癖は「スマートに行こうぜ。」で特に意味はない。1歳下の妹がいる。大和とは以心伝心が出来る程の仲。

#### 戦術

技能力と自分で作った足技格闘武術「キック・スタイル」を併用した遠近ともに特化した戦い方を見せる。

技能<sup>スキル</sup>説明

「天上天下唯我独尊」（ゴッド・イーター）

使用者：神武威 悠

#### 能力説明

このスキルはこの世の法則を無視して、人間以外の全ての万物を自分の思い通りに操ることが出来る能力。しかし有効範囲が自分を中心として半径1km以内と決まっていたり、人体に作用しないことなど自由度は限定されている。しかし、文字通り操れるのでチート的な能力である。

0 - ? (後書き)

おはこんばんちわ、傾奇です。

主人公の能力はいずれ明かしたいと思います。ちゃんと考えてあるんだからねっ！

そんなわけでサラバダー

1 - ? (前書き)

こんにちは、傾奇です。

ようやく本編が始まります。

では、ご覧ください。

俺の目の前には、天使がいる…。

…… 比喩の類ではなく、事実だ。

正確には、絵本の中とかで出てくる真っ白い、純白の翼が生えた女だが…。

その女の面は無表情だ。 なんの感情も映してはいない。

女の背後には赤黒い塊が無数にある。 その塊はかつて「人間だった」物である。

女の翼から地面にいくつか落ちていている羽毛を踏んだ瞬間に身体が破裂し、肉塊と化したのだ。

女は語る、「こんなになっちゃたけど、大好きよ。」と。

「こんなになっても愛してくれるよね、貴方。」と。

しかし、瞳は俺を見てはいない、虚空をジッと睨みつけている。

…次の瞬間、女は子供が駄々ほこねる感じにジタバタさせた。

「愛しているのに愛しているのに愛しているのに愛しているのに





1 - ? (後書き)

…はい!

今回は病んでるっばい(あくまで「っばい」ですよ。)(キャラクター

天使ちゃん(仮)が出てきました。(なんかどこそぞの「撲殺天使」  
みたいだなあ。)

というわけで、コメント、評価 まってまーす。



1 - ? (前書き)

こんにちは、幾刃です。

第2話をアップしました。

それでは、ご覧ください。



そうと思う。

そして俺は校門をくぐり抜け、学校の中に入って行った。

\*\*\*\*\*

ふうふう、ようやく落ち着けた。春麗の過ごしやすい季節といっても、朝から走ってきた俺にはとても暑い。加えて上にはブレザーを着て、人が密集している体育館なため灼熱地獄だ。

どうやってこの灼熱地獄から抜け出すか…。

そのことを考えるため俺は頭を回転させた……………。

\*\*\*\*\*

入学式が終わった。

灼熱地獄は心頭滅却を行ったため、問題は無かった。

次はクラス分けされたクラスに集まり、クラスメイトたちと担任との顔合わせらしい。

俺の配属されたクラスは「1-陸」だった。このクラス分けは姉妹校共通である。クラスは六種類あり、「1-壱」「1-弐」「1-参」「1-肆」「1-伍」「1-陸」だ。これは、2年、3年も変わらず6種類で1クラス40人だ。

つまり学校の全校生徒は720人となる。

組の番号が大きいほど能力のレベルが低い奴等というのは勿論ご愛敬である。

そして俺らの学校、「東区立第3技能高等学校」も例外ではない。

勿論、この世は「格差社会」なため、レベルが高い奴等が、低い奴等を見下し、貶すこともモチロンある。

そしてそれが、当り前の常識となりつつあることも事実である。

だからと言ってそれに反発をするなどどこぞのライトノベルの主人公のような「ヒーロー気質」がある訳では無い、絶対無い!!...  
そうだ、絶対無いんだ。

校舎の影に数人の男子生徒（先輩たちだろうが...）が新生（女子生徒）を取り囲み、無理やり連れて行った、のを見て後をつけている事実なんて無い、絶対ない。

.....っ!!!!!!!!!!

仕方がない、な。こんな気質になったのはあのバカのせいだろう...  
などと考えていると先輩Aがあざとく上手く隠れているところの俺を見つけやがった。

...こうして俺の「入学式」は受難から始まった。

t o b e c o n t i n u e

## 1 - ? (後書き)

と、言うことでこんにちは、幾刃です。

本編2話目なのに2部構成になりました。

すいません。

できるだけ早くuploadしますので楽しみにしていてください。

それでは、サヨナラ。

## 1 - ? (前書き)

こんにちわ、幾刃です。

第3話をアップいたしました。

では、ご覧ください。

はあ――――――  
――――――

上手く隠れてたつもりだったのに…。

まあ、いいや。ぶん殴ってトングラこくかな…。

その前に…この状況を何とかしなくちゃな…：憂鬱だ。

現在、俺が見つかって俺が先輩たちに囲まれている。(つけているネクタイが赤いから三年生。俺たちは緑、二年生は紺色である) そして連れ込まれた女子学生はリーダーっぽい人に拘束されている。どうしよかな…。

最初に考えた作戦通りここで相手を叩きのめして、ズラかってもいいのだが…相手は如何せん先輩だ。能力のレベルがわからないし…ああああああ、もうなんでこんなに入学式早々メンドクサイ事になったんだ。

そんなこんなで必死に頭を回転させている中、俺の前方にいてなおかつ俺をあざとく見つけやがった先輩…仮にA先輩と呼ぶが話しかけてきた。

「おい、1年。」

中々、威圧的である。これが3年生の貫録だろうか…。話しかけられたので礼儀としてちゃんと返事を返す。

「なんですか？先輩。」

「オレたち就職でストレスため込んでんだ、おとなしく殴らせるへっへ。」

俺の右側に居た先輩：Bが今度は話しかけてきた。中々な下種野郎である。

「無理です。」

俺はキツパリと断った。当り前な事だが：喜ぶような奴なんかただのM野郎だろう。

「ああん？粹がつてんじゃねーよ、1年。」

今度は左側の先輩：Cが言ってきた。テンポがいいな、先輩たち。

「大人しく殴らせてくれないと、彼女：どうなっても知らないよ??？」

「…ちっ。」

人の口封じの常套手段だが、かなりウザいものがある。…人質：彼女とは初対面なのになんでこんなになつてんだろうな俺。

「さあさあ、覚悟決めちゃった??殴るよ？殴るよ?？」

「げへへ、オラア。」

「……。」

上から順にC、B、Aの順である。俺は鳩尾、肩、アバラと様々に殴られる。それにしても：痛いな。





「大丈夫です、ありがとうございます。」

うおっ、初めて声聞いた。なんというか、艶やかな声だな…。

「君！…大丈夫か？」

うおっ！！びっくりした。

「あ、えっ、大丈夫ですけど…。」

「とてもそうは見えないが…。」

ん？そんな変か？俺？

「そんなに変な顔ですか？？」

「へ？だって、顔中、痣だらけだぞ？？」

あ……：そういうば、殴られてたんだっけ？俺。

「…まあ、いい。話は生徒会室で聞くことにしよう。二人ともついて来てくれ。」

そうして、俺と彼女は生徒会室に連れられて行った。

\*\*\*\*\*

「んで、その時に私が来たのか…。」

「はい。」

簡単なあの事件の話が終わって、ようやく、一息付けた。

彼女：八雲 飛鳥 さんは俺の隣に座って風紀委員長様：霜月 沙良 先輩と応接室用のテーブルを挟み向かい合わせの状態で話をしていた。

「それで、間違いないか？飛鳥ちゃん。」

「はい、間違いありません。」

八雲さんは、気丈な女性だな と思った。普通はあんなことが起きたらトラウマになるだろう。なのにも関わらず気にしてない感じがある。

そんな感じに思考に耽っていると、隣から

「だ、大丈夫か？傷が痛むのか？」

と、目に薄っすらと涙を浮かべた八雲さんが居た。

「だ、だ、大丈夫ですよ。だから、そんな泣きそうな顔しないでください。」

本気で焦せてしまった。

「おやおや、女を泣かせたなんて罪作りなおとこだねえ〜大和君。」

霜月先輩……ニヤニヤ笑わないでください。

「さて、事件概要もきけたし終わったからそろそろ各々の教室に戻ろうか、二人とも。」

「…グスツ…はい。」

「…あ、はい。…はあ、泣きやんでください。大丈夫ですから。」

あんがい気丈では無いのかもしれないな、八雲さんは。

\*\*\*\*\*

「それじゃ、私はこっちだから。」

「あ、分かりました。さよなら。」

先輩はイソイソと教室に帰ってしまった。

そして八雲さんは「1・き」らしいのでここでお別れである。

「それじゃ、さよなら。」

と、俺が言うと

「…あ、うん……………えっ、と、ありがとう。うれしかったぞ、助けに来た時！…じゃね。」

と、言ってフワリと春の「桜」を連想させるやさしい微笑みをみせると彼女は教室に帰って行った。

その微笑みの余韻にしばらく浸っていて気がついた。

美化されてないか、俺？



1 - ? (後書き)

はい、ということでごんにちわ、幾刃です。

初めて、2部構成物を書きましたが…どうでしたでしょうか？

というわけで、ヒロインも登場しました。イエーイ。

次は来週アップ出来たらしめますので楽しみにしてください。

それでは、サヨナラ。

1 - ?  
『改訂版』(前書き)

こんにちわー、傾奇です。

なんとか、アップ出来ました。

では、ご覧ください。

あの受難で悪夢の「入学式」から1週間たった今日。

俺はあるところに向かっていた。そこは、俺の格闘術（武術とも言うが…）の師のところである。

その男の名前は「八雲 梓」（やくも あずさ）と言う。

この人は、俺を拾い育ててくれた云わば「命の恩人」というやつだ。

まあ、俺の話は置いといて…とりあえず向かっている。

住んでいる家は古く大きな武家屋敷で、本人曰く「僕が勝手に住みついてたら土地の所有者に勝手になつてた」らしい。

……このように僕の周りには奇人しかいないらしい。…困りものだ。

そして梓さん（この前、「梓」って名前女みたいですね」と言ったらタンコブが1週間くらいかかってようやく治る拳骨を食らった…どうやら、コンプレックスらしい）は忍らしい。

忍と聞いて皆はどう思うだろうか。大概はバカにするだろうか俺は信じている。

…まあ、あくまで本人が言っているだけだから嘘の可能性は否定できないだろうが。

\*\*\*\*\*





「そうだね、置いとこうね。」

「地の文を読まないでくださいっ!!」

ほんとにこの人は……!!

「そこに寝てると風邪ひくよ？縁側に来なさい。」

ホントに鬼だなっ!!この人は。

\*\*\*\*\*

「まずは、合格おめでとう!!…かな？」

「疑問分で言われましたも…。」

なんとか体力が回復した次の会話がこれだ。膝から崩れそうになる。

「うそそうそ、おめでとう。」

「ありがとうございますノノノ」

素直に言われると…照れるな。

「あ、そうそう。今日土曜日だから泊っていきなよ。」

「えっ…。」

「好意は素直に受け取るべきだぜ。」

「じゃあ、泊ります。」

「よし、じゃあ行こうか。」

「行ってくつて何処に？」

「ん？家だよ。」

「え？ここに泊るんじゃない。」

「あはははは、それは君だからここに泊らせてたんだぜ。」

「あんだ、最悪だなっ！！」

俺が弟子の時代（中3の時に免許皆伝された）の時は、ずっとここに泊まるときはこの屋敷だった。

勿論、断熱材なんかなくまさしく冬は凍えた…。

…このように俺の師は真性のSなのだ。俺はMじゃないがな。

\*\*\*\*\*

その家は一般住宅通りで暖かった。

しかも、そこは10000階段入口付近にありとても師匠に殺意が湧いたとだけ記録しておこう。

まあ中は広がった。

最初にリビングに通されて炬燵に勧められた時には涙が出そうだった。

心の中では「チクシヨオおおおおお」とだけ思った。

ホントーにどSなんだなと思った。

\*\*\*\*\*

時計をふと見ると18:00を回っていた。

さてそろそろ何かしらの手伝いをしなければと思い、腰を上げると

「何もなくていいよ。」

と、言われた。

アンタはエスパーか。

するとリビングのドアが開いた。

「父さん、お客さん……か……?……!!」

「ど、どつも。」

そして俺は再開を果たした、「八雲 飛鳥」と……

t o b e c o n t i n u e

1 - ?  
『改訂版』 (後書き)

えーと、こんちわ。

傾奇です。

僕の小説は2部構成を主体として作っていききたいと思います。

それでは去らば。

## 1-1? (前書き)

チエルシー。

上は俺流挨拶です。∴ということで、チエルシー。  
傾奇です。

12月に入って初めての更新です。  
と、いうことをご覧ください。

「……？」

「グググググググッ」

今、俺の前には鍋がある。そして幸せそうな父娘。

「はい、父さん。白菜だ。」

「ん？ありがとうございます。」

「ふふっ。父さん、ご飯粒がついてるぞ。」

「ん、そうか？」

「ほら……」

甘い…甘すぎる！！これはホントに親子か？？  
字面だけ見れば恋人のそれである。

「ん？大和君、食欲ないのかい？」

「大丈夫か？」

「い、いえ、大丈夫です。」

心配そうに二人とも顔を見てくるが大和は何とかこらえる。

と、というかこんな甘々なものを見せつけられての食事だから、大

和は色々な意味でお腹いっぱいなのである。

傍から見ても二人は美男美女の組み合わせなので大和は居心地の悪さを体験していたのだ。

梓は飄々とした態度をしているが、顔の糸目と無造作に結った長髪が見事にマッチして、元来の顔の作りがそうなのだろう…顔のほりが深く、神々しい美しさがあった。

それに対しての飛鳥。長く美しいキレイな黒髪をポニーテールにして、女の子らしい特有の体つきで、スッキリしているところはちゃんとスッキリしていて、出ているところはちゃんと強調しているというワガママボディであった。

顔はキリッとした目尻、シャ、と細い眉毛をしていながらも目は慈愛に満ちており全体的に優しいイメージを持たせていた。

……ふうう、やはり神様は平等ではなかったらしい。

と、心の中で大和はぼやいてみたもののこの甘々空間での食事は…  
というか胃袋は色々と満ち足りすぎて最早吐きそうなので

「風に当たってきます」

と述べ大和はこの居心地悪い空間から抜け出したのだった。

\*\*\*\*\*

ひゅーーーーー、ひゅーーーーー

いくら春とはいえ夜は冷え込むものである。



俺は10000階段の上の寺の縁側にポツンといた。

どうやら今宵は満月らしく周りが明るい。

そういえば、昔は一人が多かったが、最近は仲間とつるむことが多かった心は孤独感を感じていた。

昔かあ。昔は、ホントに色々とありすぎた。

否、そのありすぎた経験の一つの中の在りし思い出と仲の良いあの親子を自然に、無意識に重ね合わせていたのかもしれない。……自分の人生の幸せの絶頂にありながら人生の最悪な汚点…最早過去のことなのでどうでもいいが

.....  
.....ヒューー、ヒューー、ヒューー。

.....  
今夜は春で多分一番冷え込む夜となるだろう.....

\*\*\*\*\*

私は何とか10000階段を上りきって彼を見つけた。  
声を掛けようと思ったが彼はひどく哀愁漂い深く何か悲しんでいるようだった。

私は、何も言えずその場を立ち去った.....



11? (後書き)

チエルシー。

ということで、主人公の過去に触れましたが(触れられたのかな?)

如何でしたか?

コメント、評価お待ちしております。( > < )

## 1-1? (前置き)

チエルシー、傾奇です。最近は…リアルが忙しく久しぶりに更新となりました。

前置きは置いといて…ご覧ください。

11?

「んっ~~~~~、終わった」

昼食時間、大和は背伸びをしながら教室に帰るため廊下を歩いて  
いた。

大和たちは今日、実習だったので実習室から教室に帰っていた。

現代の実習が指す言葉の意味は端的に言つと「技能<sup>スキル</sup>の使用」で  
ある。

ただクラスが上だと実習には先生たちが付き、内容が難しくより  
濃密になり大和たちのような底辺クラスだと内容がいくらか簡単  
なる。

その理由は簡単なことだ。研究者たちは実験するなら試験体は優  
秀な物を選ぶ。

そしてそれを育てるにはそのレベルにあつた教養が必要となる。  
つまりそういう事である。

\*\*\*\*\*

「やあ、大和君。久しぶりだね」

教室で弁当食つてると霜月さんが入ってきた。

「…久しぶりです、どうかしたんですか?」

「いや、ちょっと野暮用でね…」

そうやって先輩はショートカットの前髪を軽くかきあげた。  
先輩は可愛い、綺麗という言葉よりハンサムという言葉が似合う  
先輩だ。

教室に入って来た時から先輩をチラチラと見る視線があり、その  
全部が女子である。

まあこの先輩は女の子に好かれるタイプなのだろう。

そんな風を考えているときいきなり声が掛けられた。

「と…君、大和君！聞いているのかい？」

「あつ…すみません、聞いてなかったです」

「まったく…」

そうやって頭を抱えるポーズさえハンサムだった。

「で、何なんですか？」

「んっ、そうだった。今すぐに飛鳥ちゃんのクラスに行ってきた  
くれないか？」

「…え、俺ですか？」

「君以外にいないだろう？」

「なぜですか？」

ホントに不思議である。自分で行けばいいのに…。  
そんな俺の考えを読んだのか先輩はこう言った。

「私が行ってもいいのだが……ちょっと吉組の女の子たちが苦手  
でね……」

どうやら俺の考えてたこととピッタリと合った。  
仕方ないので、

「分かりました、いいですよ。」

まったくもって仕方ないことだった。

「うん、ごめんね？」

「いいですよ……」

そして俺はちょうど飯を食い終わり重たい腰を上げた。

\*\*\*\*\*

「ダメです!!」

いきなり吉組の女子軍団にこんな事を言われた。  
まったくもって驚きだ。

「いや、なんで？」

「あなたが陸組だからです」

理由が何とも言えない。

まったくもって幼稚な理由だ。

押しても引いてもダメなので俺はそそくさと吉組の教室を後にした。



11? (後書き)

如何でしたか？

感想・コメントお待ちしております。

それでは去らば

1 - ? (前書き)

チエルシー

冬休みに入り、初めての更新です。ではご覧ください。

1 - ?

そうして大和は教室に帰ってきた。特に気落ちした、暗い表情もするべく普通に帰ってきた。

大和は霜月を見つけると声をかけた。

「ただいま帰りました」

「ん？ああ、お帰り。…でどうだった？」

「いや、会えさせてもらえませんでしたよ」

「？？？どういうことだ？」

「「あなた最低クラスの愚図だから合わせれるわけないじゃない！！」」  
「っという事です」

「……っ！！……ごめんな、不快な思いをさせて……」

「先輩、あなたの所為じゃ無いですよ」

「でもっ！！」だから、大丈夫ですって」

「ホントか？」

「はい」

ポリポリとどこか照れたように頬を掻く…そんなのは幻想で無表

情に大和は言う。

それが、あまりにも普通すぎて霜月は逆に違和感を覚えてしまった。

だがさっきの負い目があり、深く聞けなかった。なので普通に確認だけした。

「ホントか？」

と。

それに対して大和は同じ返答を返したただけだった。

\*\*\*\*\*

もつきゆ、もつきゆ、もつきゆ、……「くん。

俺の目の前の友達1の飯の食い方を擬音を用いて表すならこれが最も適切であろう。

今は昼食時間。そして此処は食堂。

今日は気分的に弁当を作ってきたので俺はそれを食べている。

だが友達1は周りのお姉さまたちからのプレゼント(という名のお近づきの印)を食べていた。

名前は「衣川 衣」(きぬがわ ころも)。

見れば分かるが…所詮シヨタ子というやつである。

勘違いしないでほしい。俺たちの関係はただの友達である。

まあ置いといてこいつは何故か俺になっっている。…不思議なもんだ。

それにしてもこの柔っこく細い身体の何処にこれだけのものが入るのか不思議だ。

「……………」

「……………」ふう、「ちそうさまでした。…ってどうしたの？」

「相変わらずの食欲だなんて思ったただだ。」

「む？」

「はあ…」

話は変わるが、こいつは可愛い外見をしている。サラサラの栗色の髪の毛、感情によって様々変わるクリクリの大きな瞳。

だから首をかしげるといふ動作をしただけであたりを取り囲んでいたお姉さまたちが一斉に倒れた。

ようするに自分の外面ぐらい確認しとけという話である。

「あー！時間が無いよ、いこつ、やつくん。」

「ああ。」

ホントに自覚してもらいたいものである。

俺たちが席を立つと同時にバタツバタツと何かが倒れる音を聞いた。

\*\*\*\*\*

いくらクラス格差があるとはいえ、いくら機械の流れ授業とはいえ、クラスの担任はちゃんと人がするというのはいつの時代も変わ

らないものである。そしてそれは学園島の何処の学校もかわらない。今の時間は金曜日の6校時。共通LHRの時間である。

教卓には我らが担任、「百地 真理」（ももち まり）先生がたっている。

クールビューティー。

彼女を表すなら最もそれが適切である。

今回のLHRの議題は1学期の初っ端にして大きな行事「部活動対抗戦」の話である。

しかし俺は何の部活にも属していないので関係ないが…。

それでは部活動対抗戦の話をしたと思う。

部活動対抗戦：部活動のメンバーの中から5人選抜してトーナメント戦をしていく。

そして優勝した部活動には学校から配布される部活動費用が多くなる

という行事である。

トーナメント戦と言っても戦いではなくスポーツで戦うということころが少し変わっているところぐらいか…

まあ、要するに俺みたいな帰宅部員は直接関係ない行事ということだ。

なので俺は先生の話をも右から左へ聞き流した……

1 - ? (後書き)

チエルシー

ということでも新キャラ二人出ました。

感想・コメントお待ちしております。

1-1? (前書き)

チエルシー

っということで傾奇です。

八話目を更新です…その間に成績やら何やらありましたが……うん、心配ないさ〜(爆)  
ということでご覧ください。



11?

さてLHRも終わり、大和は部活に所属も何にもしていないのでさっさと帰ろうと帰宅の準備をしていた。

そして準備も終わり大和はさっさと下校したのだった。

\*\*\*\*\*

「お、おかえりー」

帰宅すると、同居人が声をかけてきた。

どうやら向こうのほうが早く帰宅したらしい。

この同居人の名前は「神武威 悠」（かむい ゆう）。

この学園島の中で「NO1」…即ち最強の能力者という肩書きを持っている。

不思議な縁で仲良くなったのだ…今思うと大変不思議である。

それは置いといて、

「おう、ただいま。今日は随分と早いな、何かいい事でもあったのか？」

「ああ…」

「ん？変だな、いつもははっきりと物事を言うお前が言葉濁すなんて」

「えっ！？あつ…と、妹がな…来るんだよ…今日」

「ああ、そんな事「そんな事とはどういう意味だ！！お前今すぐ

表へ出やがれ!!」

「…はあ」

大和は失念していた。この最強はとてつもないシスコンだということ…

「分かった、分かった。謝るから…な」

「ふん、まったく…」

「まあいいや。飯足りるか怪しいからスーパーに行ってくるからな。」

「え? ああ、分かった」

はあ、まったくとボヤきながらも大和は、24時間営業の大型スーパーへと出向いたのだった。

\*\*\*\*\*

「ん、何にしようかな?」

主夫、大和は悩んでいた。今晚の献立に…

ここまで主夫業が似合う主人公も珍しいものだ、それは置いといて…

「魚だな」

魚系統と決定したらしい、美味しいもんね。

「鮭はどこかね？？つとあった、あった」

そんな風に今晚のメインのオカズを探していると後ろから声を掛けられた。

「久しぶりだな」

「ん？ああ、久しぶり」

そこにいたのは絶世の美少女& a m p・梓さんの娘である八雲飛鳥だった。

「どうかしたのか？」

「いや、その今日は済まなかった……」

「何かしたつけ、俺？」

「ええ？教室でのアレだ。」

「？教室でのアレ、教室でのアレ……．．ああ、アレか！」

「…もしかして忘れてたのか？」

少し呆れた口調である。仕方無いだろう、色々合ったんだからと文句を言っても意味が無いので、そんな思いを華麗にスルーする大和。

「だって気にすることでは無いだろう？」

「いや、気にすることだと思っぞ?」

「ふーん、まあいいや。一人で来たのか?」

「いや、父さんだ。ほら来たぞ」

後ろを振り向くと梓さんがやってきた。

「やあ、大和君。久しぶりだね?」

「そうですね、久しぶりですね」

チラッと大和は時計を見ると時刻はもう17:00を過ぎていた。

「あ…時間があれなんで、失礼します」

「うん、じゃーねー」

「ああ、さよなら」

そういつて二人と別れた。

\*\*\*\*\*

「はあ、はあ…ただい…ま?」

大和は急いでスーパーから我が家へと帰りついたのだった。

しかし何故かリビングが騒がしい…。

不審に思いながら、リビングに入ると神武威の妹が目には涙を浮かばせながら横に大きく尻いだ右手を振りかざす場面に遭遇したの

だった。

まるで、現実の感覚がせずボケツと大和は見ているとその神  
武威の妹が大きく振りかざした右手は悠の左頬に見事にHIITした  
のだった……パチイイイインと大きな音を立てながら……。

11? (後書き)

ええと、はい。チエルシー

何か兄妹ゲンカで終わりました(笑)

次回を楽しみにしてください。

シスコン兄貴がどうなるのか、というわけですらば。

## 1 - ? (前書き)

新年明けましておめでとうございます。

今年の8月で1周年となります 関係ない

というわけでチエルシー

傾奇です。

新年の初投稿です、それではどうぞ。

1 - ?

「うわあああああん!!!」

さて俺の膝の上では大の男が泣いている。

…言わずと知れたシスコン、悠である。

「何があつたんだ？」

「菜月に嫌われたああああ〜!!!」

うん、イラッとする。

「何があつたんだ？」

「嫌われたああ〜!!!」

喧嘩の理由が一向に見えない。

まあ、話のキャッチボールは出来ているが…。

こうなった悠は一向に使えないので妹の菜月ちゃんに話を聞こう。

「菜月いいいい〜」

こいつは置いていこう。

\*\*\*\*\*

コソコソ。



大和は菜月の部屋の戸をノックする。

「…誰ですか？」

部屋の主の声はすごく暗いものであったが返事があった。

「ああ、俺だ。大和だ。」

そう大和は返事を返すと

「どうぞ」

と言われて部屋に誘《いざな》われた。

\*\*\*\*\*

久々に入ったが、これはすごいな…。

俺が入ってすぐに目についたのがぬいぐるみの山である。

おおう、何か怖っ！！

まあとりあえず話を聞こう。

「で、何で喧嘩したの？」

俺もさっさと解決したいのでチャツチャツと本題を切り出した。

「…笑わないで、聞いてくれますか？」

「ん？…まあいいけど」

なにやら真剣な話らしい。何なんだろうか一体？

「け…喧嘩した、り…理由は…」

「……」

何やら恥ずかしい理由らしい。顔が羞恥で真っ赤である。

「志望校が兄さんと一緒の第一高校にしたいって言ったら、兄さんが「ダメだ」って言ったから…です／＼」

すつ／＼すつ／＼…はあああああ。

何なんだこの兄弟は…

頭に手をやってヤレヤレといったポーズをとると大声で菜月ちゃんと言ってきた。

「い、い…良いじゃないですか、ブラコンでも…！」

そうこの兄妹は互いがブラコン、シスコンという奇妙奇天烈な関係である。

しかし、性質《たち》が悪いことに互いが知らないという…。

「ううう、兄さんに嫌われた…」

こいつもまたグズリだした…。

「謝ればいいだろ？」

「でも…」

「でも」でもだ。謝ればアイツ許すからな？」

「…気が進みませんが、分かりました」

こいつが聞きわけがよくて本当に良かった。

「じゃあな」

そう言って部屋を後にした。

\*\*\*\*\*

俺が夕飯を作っている最中に仲直りをしたらしく、仲睦まじくリビングに降りてきた。

よかった、よかった。

そして飯の後、菜月ちゃんが話しかけてきた。

「大和さん、SATについての宿題で分からないところがあるのですが…」

どうやら宿題が難しいらしい。

別にこの後は暇なので

「ああ、いいぞ。教えるよ」

という返事です承した。

すると

「宿題を取ってきます」

と言つて菜月ちゃんは部屋に戻った。

「おい、妹に変な事するなよ!!」

俺の背後で怖いお兄ちゃんがいきなり降臨してきた。  
…ビビるわ!!

「しねえよ!!と言つてもお前にも協力してもらつぞ、菜月ちゃんの宿題」

「え、なんで?」

「いやいや、菜月ちゃんの宿題とやらは多分第一高校の模試のSAT部門のどこだろうからな…俺一人じゃ難しいってことだ」

「…」

悠はとても複雑な顔をしていた。

「ん、どうした?」

「ああ、俺には妹の考えが分からないダメ兄貴だなってさ〜」

何かとてもテンションが低い。それもかなり。

例えるなら、鬱の一手手前といった感じ。

「大丈夫だ、あくまで俺の仮定の話だ。お前がそこまで気にする

話じゃない。俺は自己保身で精いっぱいだがお前は妹が一番大切に考えている。最高の兄貴じゃないか。」

なんだかクサイセリフだが最もこの場で合っているだろう。

そうして菜月ちゃんが降りてくるのを一人でリビングで待っていた。

1 - ? (後書き)

クサイセリフって恥ずかしいね／／

という事でコメント、評価待っています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4324x/>

---

《物語の黙示録》 -Revolution Story-

2012年1月5日14時56分発行